大津百町瓦版

新　年　号［Ｎｏ．５０］
２０２２年　　１月
発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

Email：otsu.machiya@gmail.com

文化の翻訳装置としての博物館

滋賀県が歴史と文化の宝庫と言われて久しい。いまも琵琶湖を囲む地域には、日本遺産「琵琶湖とその水辺景観・祈りと暮らしの水遺産」を育んできた人々の生活や文化、景観が息づき、全国屈指の豊かな文化財が伝えられている。

ところが、県民にしても滋賀県の歴史や文化について関心を持つ人は意外と少ない。こうした状況を変えていくこと、何よりも未来のビジョンを描き、子供たちに伝えていくことが重要な課題となっている。

現在、滋賀県では県立博物館の建設事業が始動している。この博物館は、昭和三十六年（一九六一）の開館以来、滋賀県の文化財保護の拠点として大きな役割を果たしてきた琵琶湖文化館の機能を継承するものとして計画されている。しかし、機能を継承するだけでは物足りない。文化とは文化財保護だけに尽きるものではない。歴史を通じて先人が伝えてきた生活に根差した習わしや必ずしも言語化されていない伝統など様々な要素から構成されている。むしろ多くの文化財が伝承されてきたのも、こうした人々の働きの積み重ねがあってこそなのである。

かつて一休禅師は「心とはいかなるものを言ふならん墨絵に書きし松風の音」と詠じた。大自然から吹く風をモノトーンで描く営み、これこそが文化を伝承しつつ新しく創造することに通じている。それには何よりも新しい眼差しが求められる。

数値化できるもの、言語で表現できるものしか評価しない現代社会にあって、来たるべき博物館が、滋賀県が培ってきた語りえない人間の営為としての歴史や文化を現代に翻訳し、再編集して顕在化することにより広く発信することで、これからの千年の持続に耐え得るような文化と伝統の基礎を築き上げることに寄与することを願っている。

【三井寺　福家　俊彦】

現・琵琶湖文化館再生への期待

琵琶湖上に、和城連立様式の特異な景観を見せる琵琶湖文化館。昭和35年（1960）3月の開館以来、滋賀県における博物館、美術館として、さらには観光の拠点として大きな役割を果たしてきた。この館が平成20年（2008）4月1日から休館となっている。一方、滋賀県では令和3年（2021）3月に、「(仮称)新・琵琶湖文化館基本計画」を策定し、新たな文化館の建設に向けた取り組みを進めている。こうした状況のなかで、これからの扱いが注目される現・琵琶湖文化館について、その建設の経緯を振り返ってみたいと思う。

琵琶湖文化館は、県の文化向上と観光に寄与することを目的に建設された。とくに数多くの貴重な文化財を有する県にとって、博物館を有することは大きな課題であった。そうしたなかで、展望閣、水族館、博物館、美術館、文化財受託庫、プール、食堂、集会室などからなる琵琶湖文化館が建設された。建設費1億5000万円。その6割にあたる9000万円が寄付で、そのうち約7割が県内の各自治体、寺社、企業、学校、個人から寄せられたというから驚きである。

文化館の建設には、草野文男という方が大きな役割を果たしている。「ここまでこぎつけたのには、このプランの熱心な推進者草野文男氏（滋賀会館長）を忘れることはできない」（朝日新聞 昭和35年10月27日）と書かれている。「〝横紙破り〟といわれる同氏の性格」と書かれており、また自身のことを「精神一到居士だと称されたが議会では奇人扱いにされた」(「琵琶湖文化館一年誌」昭和37年3月 滋賀県）と書いている。かなりの型破り、剛腕の方ではなかったかと思われる。長きにわたって琵琶湖文化館などの建設に関わる仕事に携わり、初代館長（昭和36年3月20日～昭和38年3月31日）を務めている。

建設資金（寄付）を集めるために、まさに東奔西走の日々だったようで、２年間で８万キロを走破したと書いている。「何事も機を逸してはならない私は時に拙速を尚ぶ！モウ半期遅れたらおそらく文化館もこの形で現れなかったかも知れない。」とも書いている。好景気のため財界も寄付にあまりしぶい顔はしなかったようである。

少々長くなるが、同氏の琵琶湖文化館にかける思いを引用しておく。（「琵琶湖文化館創建記念誌」昭和36年5月）

> **琵琶湖に新しい景観を添へ、そうして湖水の美しさと、近江文化をたのしく科学するにふさわしい趣好のもとに、博物館、美術館、文化財受托庫を総合する文化館を建設することの構想を描いて見た、由来この種の事業は一般人には敬遠されがちで、経済的背景も至って弱い、この点に鑑み大衆を吸引するよう、施設を通俗化するとともに総合運営の範囲を拡充して、収入の強化を図り、且合理的な規模をもって、経営費を規制し、自主的運営の基盤を樹立することを目途に企画をめぐらし、ここをもって水上展望閣と琵琶湖水族館をも、かねしめる必要を痛感し、位置と構造様式に研究をこらした、又景色のよい所に喫茶席の必要なことを認め食堂にもスペースを割き、他方各施設の個性と趣味を夫々完全に活かすため、配置にも苦心を払い経験をもとに使い勝手と、参観者本位を第一義に工夫を重ねた・・・**

仏教美術では来館者が伸びないという産業文化館（当時、県庁の西隣にあった武徳殿を改装した施設）での草野氏の経験から、展望閣や水族館、美術館、レストラン、植物園などが併設された。施設の経営ということに意を注いでいることが伺われる。私は、室内プールを併設していることに少々意外性を感じていたが、実は当初、琵琶湖から直接ヨットで乗り入れられることを計画していたが、耐強性からプールに変更されたとのことである。

「使い勝手と、参観者本位を第一義に工夫を重ねた」と書かれているが、エレベーターをなぜ設置しなかったのかと、今となってはそのことが大きく悔やまれる。利用者にとって５階の上り下りは苦痛である。展示品を運搬する施設のスタッフにも、その出し入れに大きな負担を強いることになった。

各種の特別展の開催や常設展の充実、調査研究や教育普及の取り組み、琵琶湖文化館友の会の結成、さらには比叡山や琵琶湖ホテルなどとつなぐ定期観光バスの運行など、入館者を確保するための工夫と取り組みが行われている。昭和30年代末から40年代には20万人前後の入館者を数えている。

昭和59年(1984)に県立近代美術館、平成4年(1992)に県立安土城考古博物館、平成8年（1996）に県立琵琶湖博物館がそれぞれ開館し、それに伴って収蔵品や魚類、またそれを十分管理していけるだけの人材やノウ

ハウまでも含めてそれぞれの館に移管され、琵琶湖文化館はその役割の多くを他館に譲ることとなった。こうしたなかで、耐震診断ができていない、バリアフリーでない、建物が老朽化している、入館者が減少しているなどの理由から、休館という状況になった。

冒頭に記した「(仮称) 新・琵琶湖文化館基本計画」には、現・琵琶湖文化館の取り扱いについて、「建物の老朽化等の現状から、少なくとも博物館施設としての利用は困難です。今後の琵琶湖文化館建物の取り扱いについては、民間事業者の意向の聞き取り調査等を行い、地元大津市のまちづくり計画との整理を図りながら、合意形成を図ります。」と記されている。

バリアフリーでないこと、外光を取り入れる開口部が限られていることなど、他の用途に活用するには大

[屋根の上のオニヤンマが有名でした]

きな課題があることは否めない。しかし、その特異な景観は大津そして滋賀の近代の歴史に大きな記憶を刻んでいることは異論のないところであろう。

湖上に建つ琵琶湖文化館を現代に蘇らせ、大津そして滋賀の文化や観光の向上に今一度大きな役割を果たすことを心より期待したい。

[会 員　森 川　稔]

私の百町館当番日記より

貴重な百町館大事にしたいです

ある秋の日、百町館に、友人の結婚式出席を兼ねてドイツより来日され、日本各地を観光されている方達が立ち寄ってくださいました。

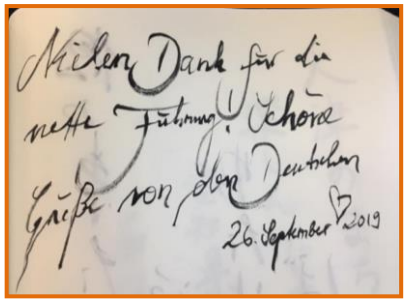
ストレッチャーに横たわっておられるその方は、ご友人二人がストレッチャーを持ち抱えられても、残念ながら通り庭までしか入ることができませんでしたが、友人の一人にはカメラを通して台所や大広間を見せてもらい、もう一人の友人にはその方の口の形を読んでもらい、それに答えるように多くの言葉でこの町家の様子を伝えてもらっておられました。

大広間の”大津間”や大津の町屋の特徴、賑わっていた大津百町の話なども熱心に聴いてくださり、さらにはその当時の時代背景やさかのぼって大津京の話までも興味を持って聴いてくださいました。

横たわられていたその方は、口以外は自分で動かせないようなハンディキャップをお持ちのようでしたが、三人の中でその方が一番日本の歴史に造詣が深い方であるとのこと、体が思うように動かなくても、日本の魅力が彼の体をつき動かして友人に助けられながら、遠路はるばる来日されたその姿に、私はすっかり心を奪われました。

町家の建物、その当時の生活や文化の魅力は、海を超え、時を越えても伝わるもの。

町家を守ることはその良さ、大津や日本の良さを伝えることなのですね。



[ドイツの方が奉加帳に記されたサイン]

もっと町家の事を考えたい

実は私は京都生まれの京都育ち。観光地が嫌というほど周りにあるところで育ちました。海外の方も嫌というほど出会っています。でもこの百町館での出会いは、人生の中で印象深い思い出の一つとなりました。大津に住み始めた頃はあまり出会わなかった海外の方も、百町館にいると出会います。今回のことで、しみじみ大津や日本を少しでも語れる人になりたいと思った次第です。そして、草の根交流は楽しいということも。

そして実はその日もう一つ嬉しい事がありました。大坂から来られた日本の方が「時がそのまま止まっている空間を大事にされていて、貴重ですね。素敵ですね。」と言ってくださったことです。観光ナイズ化されている所はキレイだったり、わかりやすく説明書きがされていたりしますが、残念ながらその当時の生活のありのままの風情を残していないところもあります。百町館の良さはその当時のままに在るということをその方は教えて下さいました。

大事にしなくちゃいけないもの、伝えていかないといけないものに気づいた大事な一日となりました。

[会 員　森 本　知 里]

まちづくり「大津百町館」の額絵
近江八景絵図

［ 疋田春湖による近江八景額絵 ］

「大津の町家を考える会」の『大津百町館』の座敷に額絵が掛けられています。この額絵は近江八景が描かれていることは会員も分かっていましたが、誰が描いたものかは殆どの者は知りませんでした。ところが昨年、大津市歴史博物館の木津副館長が調べて報告して頂きました。

この額絵を描いた画家は、疋田春湖によるもので、明治２４年～昭和３６年(1891～1961)生存されていた画家だそうです。彼は、膳所「蘆花浅水荘」の山元春挙に師事しており、滋賀県の画家としても有名な方だそうでした。滋賀県立美術館にも郷土の画家として、幾つかの作品が収蔵されているそうです。

膳所３６景を切り絵に

昨年秋、膳所市民センターの二階の膳所歴史資料室で膳所学区内の身近な風景を切り取った、３６ヶ所の切り絵展示が行われました。これは谷川博己さんが自ら選ばれた膳所学区内の３６景のスケッチをもとにして、切り絵にされたものです。

もとのスケッチも幾つか展示されていましたが、本当に細かな根気のいる作業をよくなされたものと驚きました。

作品展は終わりましたが、機会があればまた見てみたいと思いました。

上の切り絵は　北向き地蔵

下の切り絵は　膳所本町駅

編集後記

今号は５０号となる記念の新年号の予定でした。内容も早くに決めていましたが、ＰＣ、ＵＳＢの扱いに間違いをしてしまい、完成状態まで作成して来たものが消えて無くなったのです。さて次号以降はどうなるのか作成者自身が不安です。

［ Ｋ．Ａ ］

まちなかで何時でもクラシックをかれこれ２００回・・

皆さんは大津市中央丸屋町にある曳山展示館の三階ホールで行われている『大津曳山コンサート』ご存知ですか？

このコンサートは大津にお住いの宮本謙二さんが企画され、なんと平成九年（一九九七）から行われています。年四回のペースで開催されてきましたが、昨年、一昨年とコロナ禍の為三回しか実施出来なかったそうです。そこで飛んでしまった九四回と一００回を今年実施されるそうで、記念の一００回目コンサートになるそうです。

お聞きすると、この『大津曳山コンサート』以前から「まちかどコンサート」として浜大津にあった喫茶店で（一九八六年）から九０回以上も続けて演奏会をされてこられました。

だからこの大津のまちなかでのコンサートはトータル二００回近くになるんではないかと宮本さんは仰っています。

宮本謙二さんはファゴット奏者として、関西フィルハーモニー管弦楽団を皮切りに２０１９年まで日本センチュリー交響楽団の首席ファゴット奏者を務めてこられました。

なんと先の「まちかどコンサート」も含めるとなんと三六年もの長きに亘って大津のまちなかでの音楽活動を継続されてこられました。

１００回目を迎える曳山コンサート

曳山コンサートに　お越しください

いよいよ今年はコロナで飛んだ九四回目と一００回目のコンサートです。

日程は

九四回　三月一三日(日)　午後二時より

そして**一００記念コンサート**は

(予定)五月八日(日)午後二時です。

参加費は￥２０００です。

お飲み物が付きます。初めての方もお気軽にお越しくださいとのことです。